

河川と人間——有史以前から

そこは、唯一の水源地であった。ありとあらゆる動物達が、水を求めてかわるがわる姿をみせる。なかでもやっかいものはサイ。彼女達はここで水浴をし、放尿する。そのため、貴重な水はいつも強烈なサイの尿の臭がする。いくらこしても煮たてても、この臭はとれず、毎日これを利用するわれわれにも、やがてサイの臭がしみついでしまった。アフリカの有名な猿人遺跡オルドバイで発掘を続けていたL・S・B・リーキー夫妻は、こう書き残している。

水は、貴重な存在である。太古から、動物はもちろん人間にとっても、水場の存在は不可欠のものであった。そのうえ、集まってくる動物たちが、人間にとって絶好の狩猟場を形成していた。だから、河・湖・泉などは人間の種族維持そのものにかかわっていたわけだ。やがて人間は「水」にもうひとつの重要性を見出した。それは輸送や移動のための通路としての価値である。最近の先史考古学の研究からすれば、人間がかなりの幅の水域を移動することに成功したのは、古くホモ・エレクトスの段階からである。また、一〇万年前以降のホモ・サピエンス段階になると、人間は対岸を見えさえすれば、河といわず海をも渡ったことが確認されているのである。

だが河川の重要性は、それにとどまらない。それは河川が「淡水魚」という大量のタンパクの供給源であることだ。これに目をつけた最初の人間は、クロマニオン人以前であることは疑いない。しかし漁撈が生活にとって重要な一部となったのは、疑いなく彼らの時代からであった。

フランスのドルドーニュ地方といえば、クロマニオン人が最初に発見されたことで有名であるが、この地帯に見出される岩陰遺跡からは、かなりの量の魚のウロコや骨の化石が層になって検出されている。地理的にみても、これらは淡水魚であり、それも産卵のため

川をさかのぼってきたサケ科のものであることは、ほぼ確かという。この地方のクロマニオン人は、多くの絵画・彫刻を残した芸術家としても知られるが、それらの作品の中に、明らかに「あぶらびれ」をもつ魚の絵や骨製彫刻のみられることから、この推理は正しいであろう。

これらの淡水魚を、どのような方法で捕えたのかについては、まだはっきりした証拠はあげられていない。しかし、ヤナの一種やヤスガが利用されたことは、まず間違いあるまい。また、南アフリカのネルソン湾の洞穴遺跡からは、骨製のヤスと中央部に若干のくびれをもつ、ちょうど磁石の針のような形のツリ針（ゴーチユ）が発掘されている。この例からすると、地上最初の釣人は、この段階に出現した可能性さえある。また、旧石器時代末あるいは中石器時代に属するフランスのソルビニエ遺跡からは、小石を敷きつめた広い四辺形の遺構がみつかり、考古学者によって大量の魚を干す場所であると推定されていることもつけ加えておこう。

シベリア・極東地方のクロマニオン人の遺跡からも、同様の発見が相次いでいる。イルクーツク州アンガラ河右岸のクラスニイ・ヤル遺跡第II文化層からは、サケ科とおもわれる魚骨が、あるいはレナ河上流のマカロヴォ第II遺跡からは、角製のモリと体長二四〜二五cmくらいの淡水魚の骨が発掘されている。ともに二二〇〇〇〜二三〇〇〇年前ほどの古さである。この地域では、淡水魚の利用は時代が新しくなるにつれ急速に増加するよう見受けられる。たとえば、一〇〇〇〇〜一一五〇〇年前のウスチ・ペターヤ遺跡からは、チヨウザメ、タイメン（イトウの一種）、シチュウカ、オクンなどの淡水魚類骨がまとまって発掘されている。

食料としての魚類の占める比率の増大は、アリゾナ大学のマーチン教授の言うように、たしかに陸上大型動物の極度の減少—OVER

川と人間

KML」という見解——と全世界的におきた氣候の温暖化による生態系の変化、などの理由が大きいかもしれない。それはともかく、その後、河川から獲得される食糧資源の重要性は、ますます増大していく。シベリア古代史の権威 A・P・オクランドニコフ博士は、シベリア・極東の新石器文化を方向づけるものとして、河川の魚類の興味についてふれ、産卵のためにのぼってくる無数のサケ・マス・マスノスケなどの重要性を強く指摘している。そして、この伝統はその後もずっと歴史時代にまで続いていた。この地域の住民達、ナナイ、ウリチ、ギリヤークなどにとっては魚肉が主要な食糧であり、また、魚の皮が衣服やクツにまで利用されていたことは、よく知られている。氏族の起源にまつわる伝説のなかにも、河の波の間から出現した女性が、地上最初の人間である若者と結婚することが出発点であるもの（ギリヤーク）がみられることから、彼らの生活がいかに密接に河川と結びついていたかがわかる。

本州や北海道においても、河川のもつ意味は同様であった。先史時代の遺跡の分布が、そのことをはっきりと物語っている。最近、北海道教育委員会の手で大規模に発掘調査された千才市美沢川流域の遺跡群は、かつてはサクラマスやサケの産卵の見られた小河川、美沢川とフレベツ川の兩岸の低い段丘上に分布しており、総面積では一六万㎡をこすといわれている。もちろんこれらの遺跡は、いくつかの異なる時期に所屬するものであるが、その密度は濃い。この遺跡群のほとんどが全面発掘されているが、その集落の立地条件や古生態学的資料をみるかぎり、古代人たちと河川のむすびつきは、いままでも北海道考古学者によってばくせんと言られていたよりも、はるかにつよいようにみえる。

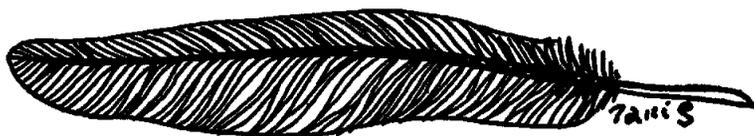
北海道東部地方では、現在あるいは過去においてサケ・マスの産卵のみられた河川には、その大小を問わず、川沿いの自然堤防の上

や低位段丘上のいたるところに、先史時代の堅穴住居の凹みが五、六個ずつ、あるいは数十個まとまって見出される。

実際にサケ科のものらしい魚骨が多数発見された遺跡として、江別市教育委員会の手で最近発掘された、江別市江別太遺跡のチースも興味深い。ここは千才川に隣接するまったくの沖積地で、遺跡は何層かの洪水の堆積物の下から発見された。おそらく三〜五世紀の頃のもので、当時は河岸か、河岸につながる沼の岸であったらしい。多数の加工のある木材が、あるものは地面につきたてられた状態で、他のものは流木のような状態で出土した。その間から、土器や石器とともに沼鉄鉱のブルーに染った魚骨が次々とみつかった。そのほとんどは、頭を除いた（くさってしまった？）残りの背椎が、そのまま並んで出土したのである。見渡す限りの沖積氾濫原の真只中に位置していることでもあるし、当然、冠水の危険性も高い。おそらく、ここには季節的な漁撈キャンプがあったと考えてよさそうだ。今回の発見から推して、同種の遺跡が各地の沖積平野下から多数発見される可能性が強まった。偶然のきっかけ以外に発見することの困難なこの種の遺跡の存在は、北海道の先史時代の集落や漁撈のパターンを考えるうえに、そして人間と河川の関連を調べるうえに、きわめて重要な意味をもっている。

人間と河川——イメージとして

人間と河川のかかわりが有史以前の歴史のなかで、どのように変化していったか、おおまかに眺めてきた。しかし、その当時の人びとが、どのような心情で河川をみつめてきたかを知ることは、きわめてむづかしい。だが、農業を持たない採集漁獵民たちのなかに、われわれとちがう心情の一部をうかがうことのできる手がかりがありはしないか。すくなくとも、近代文明にどっぷりとつかっているわれわれのような人間とはちがった感覚が流れ続けているのではな



いだろうか。

山田秀三氏の名著、「川の名」のはしがきの中に次のような語がのっている。

「日高の沙流川の水源から、山を越えると十勝川の上流である。沙流人と十勝人たちが激しく争ったとき、年老いたエカン（アイヌ語で長老の意）が、人の背に負われて現われ、沙流人と十勝人は、同じ母（山を指す）から流れた乳（水）を飲んで育ったのではないか、と和解させたのだ……と伝えられる」。この説話は、おそらくアイヌ民族のなかに伝えられている、カムイノミの詞と関連するものであろう。そのひとつ、ポン・フチ著の「ユーカラは甦える」のなかに記述されている、日高の福嶋コハナ姫の伝えるカムイノミのことばの訳を紹介しておこう。

「母親のように

カムイが流す そのお乳を

われらが飲んで育つべき

水のカムイ

水の婦人」

「川の流れを守るカムイ

カムイなる婦人が

浜へど下す そのお乳を

われらが飲むならば

われらの身も

われらの心も

のびのびと 生きてくる」

川の水が母乳として大地とアイヌを育てているという考えかたはまさに母なる河への思慕そのものである。また、多数のアイヌ語地名の中に、漁撈に関連する意味の読みとれることも、彼らの生活体系が河川漁に依存する面の大きかったことを物語っている。

ここで筆者は思い感うのである。本州では、和人の大部分が西暦紀元前後には農耕文化―弥生文化に突入していた。当時、沖積平野にひろがっていた人間集団は、ほとんどが稲作に従事していたし、稲の種類は発掘資料その他からみて、水が必要とするタイプのものであった。水田を作るためには、当然、恒久的な水路の建設が不可欠である。したがって、その全てを台無しにしてしまう洪水は、最大の災厄であったはずだ。こうした状況は、中世、いや近世においても、水田農耕民にとっては同じであった。しかも米の生産量が増加するにつれ、徐々にではあろうが河川のもつタンパク資源の重要性が、相対的に減少するにちがいない。こうした背景の中で、果して狩猟猟民と同じように河川に対して「母なる河」というイメージが持ちつづけられていたのだろうか。ましてや、日本は世界でも屈指の多雨地帯である。雨水を集めてチヨロチヨロ流れる小川や、清冽な湧泉に対しては特別な感情をもっていたとしても、「五月雨をあつめてはやし最上川」とか「坂東太郎」と呼称された関東の利根川などのような大型河川に対しては、多分に恐れもあったのではなかったか。そうなると和人もっている川に対するイメージ―清浄感―は先史時代からの伝統と言うより、むしろ後世になって宗教・信仰の中で形成された部分が大きいと考えた方がよい。一般的に和人が持っていた流水の中では全てが清められ、またその中に自己の身体を浸すことによってケガレさえも洗い流せるという確信……、全てを水に流して……云々という発想。このような思考が、本来の日本語のなかでは、どのような形で認められるのか、調べてみたいものである。筆者には、こうした和人もつ思考の片隅に、後世形づくられた、物理・機械的感覚を主として河川をとらえる見方の原点がかくされているように思われてならないのである。もし、そうだとすれば、「母なる河」という語と語感、日本語にとってきわめて新らしく、西欧文明の影響下で、日本語の中に採用されたのではな

いだろうか。

このように考えてみると、日本の各地で住民達がなんのためらいもなく、河川に大量の廃棄物を投入したり、あるいは自浄作用を妨害し、そのうえ水中生物を殺りくするような物質まで流しこんで平然としていられる精神状態の由来のひとつが、わかるような気がする。何故なら「母なる河」は、まだロマンの中でしか機能してないからだ。

よごされ、下水路となった流れは、最早河川という名に値せず、単なるゴミ運搬のベルトコンベアーでしかないと云ってもよい。ここまでくると「水に流す」ことの次は、当然の帰結として「くさいものにはフタ」になる。多くの都市の中を流れていた小川がこのような経過でフタをされ、下水道化していった。そのうえ、都市を貫流する中河川も、コンクリートで固めた直線的放水路につくり直された。流すこと……が最大の目的で、その他のことは、ほとんどかえり見られなかった。極めてシンプルな、そして科学的かつ幾何学的発想としては、まことに美事であるといつてよい。たしかに、洪水の危険性は激減した。だが、多くの箇所で見られる「立入禁止」の標識と提防の厚いコンクリートは、同時に、都会に住む人間から、本来の河川のイメージをぬぐい去り河川と人間を遠ざける役目を果たしていることも否定できない。

新しい河川——流れとの対話

札幌の街を歩いてみよう。このとてつもない人工環境の中で、中央公園の池や創成川が存在が、どれほど人々にやすらぎを与えているか計り知れないものがある。巨大なホテルの中庭につくられた人工の滝もそうだ。ラウンジではしばらくつらぐ人々の感情を、水の流れがどれほど和らげていることだろうか。

水の流れは、なぜか人をひきつけ、やすらぎを与える。これは、

ある意味で人類はじまって以来持ちつづけられた、人類共通の感情でもあるのだから。こうした人間行動をみるにつけ、その中にいままでと異なった河川の利用法があるように感ずるのは、あながち筆者一人ではあるまい。私達は、どうやら気づき始めたようだ。水呑場からはじまって狩猟場、交通路、そしてタンパク源の生産地、農作物のための利水、物資の運搬路、各種工業生産のための利水と河の物理的な機能面利用という歴史的な経過をたどり、そしていま、ようやく新しい河川観——流れる水にやすらぎを感じる、精神面上からの利用にまでたどりついた。

動物としては稠密すぎる人口をもつこの社会環境のなかに、メンタルな面を重視する利水(活用)、それは絶体に不可欠のものであるにちがいない。昨春秋(一九七九年)、札幌市内でおきた鮭の溯上事件に対する市民の反応が、なによりもその事を有力に証明している。これまで、あまり河川に関心を示していなかった住民が、突然市内の教河川に出現した鮭のニュースに耳をそばだてた。そして多数の人々が、実際に川の生命の証拠を自分の目でみつける為には河岸に集ってきたのである。動物園や水族館とは異った「自然」に、直接に触れたい……という思いが、そこにはウズまいていた。獲る為にはなく、見る為には人々はやってきたのだ。この意識を、我々は重要だと考える。人びとは、明らかにこいの場としての水辺を求めている。流れる水と群れて泳ぐ魚、そして緑豊かな河川敷、これを自然と人間のメンタルな出逢の場にセットし直すこと。これが八〇年代に求められる新しい河川観であり、人間を精神の荒廃からまもる、きわめて有効な手段であると確信してよいのではないか……。

コンクリートジャングルの中で人間の精神を荒廃させないためには、手を浸すことのできるサラサラと流れる河、そして生命に満ちあふれた河が何よりも必要なのである。

(さつぽろサケの会代表、北大理学部助教)



長さ20cm、フランス旧石器時代のサケ彫刻のある骨角器